

階級社会フランスを追及する  
『黒いスーツを着た男』

は被害者を助けようとするが、同乗した仲間  
に説得されてその場を逃げ去る。その一部始  
終を、近くのバルコニーから一人の女性（ジ  
ュリエット）が目撃していた。

●アランは自動車販売会社の幹部にまで出世  
して、10日後に社長の娘との結婚を控える身  
だった。逃げた後も被害者の容態が気になり  
ひそかに病院を訪れてジュリエットに怪しま  
れる。彼女はアランの後をつけて職場を突き  
とめ、詰問する。最初は人違いを主張して否  
定したアランだったが、一転して罪を認める。  
義憤に駆られて行動したジュリエットも、ア  
ランの懇願の真剣さに同情し、とりあえず医  
療費を払わせるだけにして、警察へは通報し  
なかつた。

●被害者は、当局から「不法滞在者」として  
扱われているモルドヴァ人難民だった（モル  
ドヴァはウクライナとルーマニアの間に位置する旧  
ソ連の自治共和国で、89年のソビエト崩壊で独立し  
た後も内紛が絶えず、多くの難民が国外に脱出して  
いるという）。妻のヴェエラは夫を病院に運ん  
でくれたジュリエットに感謝するが、彼女が加  
害者の名前を明かさず、金だけを仲介して渡  
したことに強い不信感を抱く。

●こうして、原題（『三つの世界』）が示すよう  
に、アランがめざす金がすべてのブルジョワ  
の世界、ジュリエットが属する（ある種の倫  
理規範を信じる）知識階級の世界、そして失う  
物を何一つ持たず、仲間以外の誰も信じない  
ヴェエラたち難民の世界が交錯する。通常のサ

スペンス映画なら、この先彼らが恐喝や殺人  
といった犯罪に巻き込まれて行くだろうと思  
わせる状況設定だが、そうはならない。

●出世主義者だがワルにはなりきれないアラ  
ンは、許婚者をなだめる一方、金策に奔走し  
たりジュリエットを口説いたり、と支離滅裂  
な行動をとる。生まれて初めて（魂の試練）  
に直面した若者の姿である。一方ジュリエッ  
トはヴェエラたちを助けているつもりだった  
が、いつの間にかアランに魅かれてヴェエラを  
裏切っている自分に愕然とする。彼女に出来  
るのは、関わり合いを逃れて以前の恋人のと  
ころに戻るこだけ。腰の定まらないインテ  
リらしい選択だった。しかし倫理的に最強の  
立場にあるヴェエラは、鋭く彼らの卑劣さを追  
及する。ヴェエラの夫が死んだ後、病院の医師  
たちに夫の臓器の提供を要請されると、彼女  
は言う。「貴方たちは夫が生きている間は滞  
在許可も仕事も拒否したのに、死んだら内臓  
を欲しがるとね。いったい内臓一つにつき何  
ユーロ払ってくれるの？」

●細部にわたって見事に階級社会フランスの  
現実を描き出したシナリオ、俳優たちの迫力  
ある演技を引き出した冷静な演出は、特記に  
値する。アランを演じたラファエル・ペルソ  
ナーズはアラン・ドロン再来との呼び声が  
高いそうだが、半世紀前のドロンの出世作『太  
陽がいっぱい』（ルネ・クレマン監督、1960年）  
に匹敵する記念すべき作品となった。

本野義雄（もとの・よしお／本誌編集委員）

監督・脚本／カトリーヌ・コルシニ 脚本／テノワ・ゲラフ  
ン 音楽／グレゴワール・エツェル 撮影／クレール・マトン  
出演／ラファエル・ベルソナーズ クロチルド・エム・アルタ  
ドプロシレダ・カテブ アルバン・オマール 2012年フ  
ランス国際映画祭「ある視点」部門出品作品 2012年フ  
ランスIIモルドヴァ映画 フランス語 100分 原題／Les  
mondes 8月末ヒューマン・ドラスティシマ渋谷ほか全国公開

●深夜の酒場で羽目をはずし騒ぎまわる身な  
りの良い3人の若者たち。高級車を猛スピード  
で走らせた挙句、街角で歩行者をはねてし  
まう。運転していた黒いスーツの男（アラン）